

## 目次

社会とはなにかー飢餓と飽食の世界ー  
藤田弘夫（慶應義塾大学）

石造物に見る津軽の飢饉  
関根達人（弘前大学）

山と飢饉  
長谷川成一（弘前大学）

エチオピア・ティグライにおける飢饉の諸相  
眞城百華（津田塾大学）

生業の破綻をいかに防ぐか  
ーエチオピア西南部の山地農耕民マロ(Malo)の事例からー  
藤本 武（人間環境大学）

## 社会とはなにかー飢餓と飽食の世界ー

藤田弘夫

慶應義塾大学の藤田弘夫と申します。

私が『都市と権力：飢餓と飽食の歴史社会学』（創文社 1991年）という作品で飢饉を考えるきっかけになったのは、80年代半ばのエチオピアの飢饉でした。そのときにエチオピアの飢饉の話聞きながら思いを馳せたのは近世における東北地方、とくに津軽の飢饉でした。そこで一つヒントになったことがあります、それを軸に世界史を整理してみたらどうなるだろうと思って書き上げたのが『都市と権力』という本です。

今日はその飢饉を手がかりにして、どんなふうにして世界を描こうとしたのかを紹介しながら、「社会って一体何だろう」ということを皆さんにお考えいただければと思います。

### ■ 飢饉はなぜあるのか

飢餓をなくそうと思えば人間の数よりも余計に食糧を生産すればいいわけです。そうすれば飢餓はなくなるだろう、もう少し努力して食糧をいっぱい生産すればそれで飢餓はおしまいになるんじゃないかと、普通は考えます。

しかしながら、これができないというところに大きな問題が潜んでいるように思えます。では、

それをできるようにするにはどうすればいいのか。いろいろな議論がなされましたが、にもかかわらず飢饉をなくすことはできないでいます。私はそのことに興味があります。

現在、世界にはおよそ8億4000万人の飢餓人口があるといわれています。そして、飢えや栄養不良によって1日におよそ2万7000人が亡くなっています。その一方で人類は現在、想像もつかない太陽系の果てまで観測器具を飛ばしています。こんな難しいことができるのに、たったちょっと食糧を余分に生産すればなくなるはずの飢餓がなぜなくなるのか、という疑問が浮かびます。

現在の世界の穀物生産量は、年間約20億トンといわれています。この20億トンの穀物は、だいたい140億人分の食糧に該当します。地球人口というのは現在約65億人ですから、ずいぶん余計に生産されているわけです。しかもこの65億人のうちの8億人が飢餓人口だとされています。そもそもこの飢餓人口がなかったとしても、140億人の穀物が生産されているとすれば、残りの75億人分の穀物はいったいどこへ行ってしまったのでしょうか。それは家畜の餌その他というわけです。つまり8億人の飢餓人口は、家畜などとの競争に負けてし

まったということです。

そもそも140億人分の食糧を生産しているのに、65億人の地球で飢餓人口が8億人もある。ではなぜ食糧は直接こっち(飢餓人口)の方へ行かないのでしょうか。

じつは140億人分もの食糧を作っているということは、誰かが飢えていることを前提としています。もしもこの食糧が直接、飢餓人口の中に入ってしまったら、ここでは穀物は過剰生産になってしまいます。過剰生産で穀物市場は崩壊し、そして食糧生産はガクンと落ちていきます。農民の立場から言いますと、この140億人分の食糧は人々の口に直接入ることはないんだということがあるから、過剰生産の恐れを持つことなく、安心して食糧を生産できるということなのです。

日本の農業の食糧自給率は現在39%といわれています。食糧自給率がこんなに下がって大変だといつつ、それでいて遊休農地は38万ヘクタールもあります。埼玉県にほぼ匹敵する面積が今、遊休地としてある。一方で農地を遊休にさせておいて、食糧自給率が下がったとって心配するのです。では食糧はどうかといえば、食糧は少なくとも市場には有り余るほど入っています。食糧自給率は低いかもしれませんが、食糧はいっぱいあるのです。

歴史家であるホブズボームに『20世紀の歴史』(河合秀和訳 三省堂 1996年)という本があります。彼はこの本で20世紀の大事件として、この世紀の後半に世界の都市人口が人類の過半数を超えたこと、つまり都市の時代がやってきたということを語っています。

人類は農耕するようになってからずっと植物を栽培し動物を育ててきました。人類の生活のほとんどは食糧生産に関わることでした。一方で都市の人口は、18世紀までは全人口のだいたい2%程度であったといわれています。つまりごく最近まで、人類の圧倒的多数は農村およびその周辺で生活していたというわけです。都市のこと、あるいはわれわれが「歴史」という名前前で学んできたことは例外の部分であり、その意味で「歴史」というのは都市の歴史だったということになります。

### ■ 都市の飢饉

現在、全世界の都市人口は34億人ほどです。国連は、これが2050年には86%増加し、全世界の人口の70%にあたる64億人になると予測しています。これは大変な数です。

都市人口が増えるということがどういうことか考えてみましょう。社会学者のG・ジンメルは、都市生活は人間の「自然との闘争」を「人間との闘争」に変えたと言いました。人間のエネルギーは、ごく最近まではほとんど農地が吸収してきました。

つまり農地や家畜への働きかけです。ところが都市化が進むと、人間との関係にエネルギーを使うようになります。全く違う社会がそこで出現する可能性があるということです。

都市化の進展によってもたらされるもののひとつは、飢餓から解放されるということです。

昔の農民は作物が取れなければ自分たちが食べられないから、いつも食糧の心配をしていました。私たちも3代さかのぼれば大概は農民でしょう。昔の農民やお年寄りの記録を見ると、作柄の心配ばかりしています。でもこの会場にいる皆さんは、まずそんなことは心配していません。なぜかといえば、私たちは食糧がなかったら買いに行けばいいからです。飢餓というのはあくまでも農村のものなのです。

例えば津軽が飢饉だった時に弘前の城内はどうだったか、あるいは江戸や大坂はどうだったかと都市の飢餓を探してみると、ないわけではありません。ただ、死者が出たとはいっても、それはたいがい飢饉の農村から都市までたどり着いて、そこで死んでしまったという事例です。また都市の最下層民も飢饉によって状況が悪くなって餓死することもあるでしょう。でも本来、都市に住んでいる人の多くが飢饉の影響を受けることはまずありません。

歴史上の飢饉のことを調べてみると、ある傾向が見えてきます。まず大穀倉地帯ほど飢饉があるようです。穀倉地帯の飢饉として規模の大きかったものとしては、1928~29年、1932~33年に当時はソビエトの一部だったウクライナで大飢饉がありました。1933年には約700万人が死んだといわれています。ところが、この巨大な飢饉の状況でもソビエトは穀物を輸出しています。ウクライナにはある飢饉が、ソビエトでは問題ではなかった、ということです。

20世紀最大の飢饉といわれているのが、中国で1960年から62年にかけて発生した大飢饉です。この飢饉で毛沢東が事実上失脚しています。死者数は、2000万人から3000万人ぐらいだったといわれています。

この「大穀倉地帯ほど飢饉が発生する」というのは、実はこういう場所ほど記録されやすいということです。

では都市の最大の飢餓はどれか。はっきりした数字を示せるのは第2次大戦下のペテルスブルクで、餓死者63万人という数字が出ています。これはペテルスブルクが周囲をドイツ軍によって包囲され、これによって食糧が途絶えて餓死したということです。

都市の飢餓というのはどうも戦争に関係しているようです。ただ関係するのは負け戦の場合だけです。戦争に勝っている時、都市はむしろ活気を

帯びます。つまり、都市が飢餓に陥るのは、政治経済機構が混乱して機能しなくなったとき、だと言えます。

#### □ 権力によって生み出された「余剰」

ではここで、都市民が食べる余剰農産物の話を少ししたいと思います。なぜ都市が飢餓に陥らないのか。都市は食糧を生産しませんから、農村で生産して余った部分が都市へ流れてくる。これが通常の考え方です。実はこれが間違いの原点なのです。

実際はこうです。一定量を、つまり豊作だろうが不作だろうが関係なく、あるいは農村の生産の事情に関わらず、これだけは都市に持ってくるということが最初から決まっているのです。確かに都市は農村の食糧生産に依存しています。依存しているけれども、それは農村の自給部分を越えた部分なのではなくて、はじめからこれだけ持ってきますよと決めてあるのです。つまり都市に流入するのは、絶対的余剰農産物とはかぎりません。

都市が消費する「余剰」は、権力によって生み出された社会的余剰でもいいのです。余剰農産物は絶対的なものでも社会的なものでもいいのです。そもそも余剰などない農村から農産物が生み出される、そんな可能性すらあるということです。

日本の都市化を振り返ってみますと、農村の飢餓というのは戦前には慢性化していました。農村に飢餓はつきものでした。戦後、経済の高度成長に伴って日本の都市化が進むとともに、日本から飢餓がなくなってしまいます。その後、問題になったのは、米の過剰生産の問題でした。

つまり、都市の存在には食糧の確保がすでにビルトインされていて、都市が活力をもつということは食糧が自動的に入ってくるということを前提としていたのです。つまり都市が消費している食糧というのは「社会的余剰」なのです。だから貨幣さえ持っていれば都市では食糧の心配などしなくていいのです。

たとえば、税金のことを考えてください。われわれはどうでしょうか。お金が余っているから税金を払うわけではありません。税金というのはあらかじめ社会の中でビルトインされています。だから通常の状態であれば食糧が不足するということはありません。ただ戦争に負けたような状態で、

その調達活動が駄目になってくると飢餓が発生します。

#### □ 飢餓を克服できない理由

最初の問題にもどりたいと思います。どうして人類が飢餓を克服できないか、そんなものは人間の数よりも少し余分に食糧を生産しただけで解決するじゃないかということでした。でもそれが解決できないということは、どういうことなのか。ある種の全く違った種類、つまり天王星や海王星に観測器具を飛ばす、といった技術的困難とは全く違ったような種類の問題を秘めているように思います。

ここでちょっと飛躍した例ではありますが、人類の最終兵器は何か、という問いかけをしてみました。人類はいろいろな武器を発展させてきました。はじめは棒であり、槍や弓でした。さらに刀、鉄砲はおろか、大砲、潜水艦、戦車、爆撃機、ミサイル、核兵器まで開発してきました。しかし人類を守るための最終兵器の答えの一つは、鉄砲です。いかにゾウが大きいからといって、あるいはライオンがいかに獰猛だからといっても大砲で撃つ必要はありません。鉄砲があれば、それで十分です。

では、なぜ大砲などの武器が開発されたのでしょうか。それは、大砲の標的の向こうに人間がいるからです。大砲以降の武器は人間に打撃を与えるためだけに開発されてきたのです。そんな武器などない方がいいですし、全く無意味な開発だとも言えます。でもそうしたなかで、社会が形成されてきたのです。そこに社会のあまり語られない、しかし重要な側面があるように思えてなりません。なかでも、核兵器は国家を守る神器として飢餓発生危険を犯してでも開発する国が相次いでいます。

われわれはお金が余っているわけではないのに、どうして税金を払っているのでしょうか。そこに、社会の存在があります。その調達方法は多様ですが、社会の活動にビルトインされているものです。その正当化の方法は国によってもずいぶん違いますし、その時代によっても違うものです。こうしてみると、飢餓も社会活動にビルトインされており、それが顕在化するかどうかは社会のあり方次第だということになります。

(ふじた・ひろお/慶應義塾大学)